令和八年度

首都圏入学試験問題

国語

令和八年一月十日（土）

「はじめ」の合図があるまで、この問題用紙の中を開いてはいけません。

注意事こう

一、問題用紙は1ページから14ページまでです。

二、かんとく者の指示にしたがい、必要事こうを記入しなさい。

三、解答は解答用紙にはっきりと記入し、解答らんからはみ出してはいけません。

四、問題の内容についての質問には、いっさい応じません。それ以外のことがらについてたずねたいことがあれば、手をあげてかんとく者に聞きなさい。

五、かんとく者の「はじめ」の合図で始め、「やめ」の合図ですぐにやめなさい。

一

次の各文の―― 部について、1～5のカタカナは漢字に直し、6～10は読み方をひらがなで書きなさい。

1 科学へのカンシンがある。
2 ゼッタイ絶命の状況だ。
3 ヨウイに解決する問題だ。
4 ココロヨく引き受ける。
5 議員をツトめる。
6 願い事が成就した。
7 おにのような形相でにらむ。
8 世界的に有名な絵画である。
9 手間を省く。
10 非を認めて潔く謝る。

二

二つの文中の空欄①②に、対義の漢字を当てはめて意味の通る文をつくりなさい。

1 この技術は時代とともに［①］化する。
戦争によって文明が［②］化する。

2 会社の［①］失を補う。
大きな利［②］を上げた。

3 彼の商売は繁［①］していた。
体力が［②］弱してしまった。

4 彼は貴［①］な存在だ。
学問を［②］視してはならない。

5 論文の内容を発［①］する。
平安時代、天皇の住まいは内［②］であった。

三　次の手紙の①～⑤の敬語表現はすべて間違っています。正しい表現に直しなさい。

拝啓

すがすがしい秋晴れの続く季節となりましたが、佐野様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

このたびは、お土産をお送りいただき、誠にありがとうございました。さっそく家族で①召し上がったところ、皆とても喜んで②いらっしゃいました。また、お土産に添えられたお手紙も③ご覧になりました。我が家に④うかがう日には旅先での思い出をぜひお聞かせください。

これから冷え込む季節となりますので、風邪など召されぬようご自愛ください。

まずは書中をもちまして、お礼を⑤おっしゃいます。

敬具

四　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、※にはあとに〔注〕があります。

君たちは「科学のようで科学でないもの」に出会った経験はないだろうか？

一見すると科学的だけど、本当に科学と言えるのかどうかは定かではないもの。あるいは、科学的な要素を利用して、別の目的を果たそうとしているもの。――例えば、血液型を想像してみるとわかりやすいかもしれない。君たちは友達と会話をするときに、「血液型は何型？」ということを挨拶代わりに使ったことはないだろうか？　あるいは、その人の血液型が「B型」であるというだけで会話が盛り上がった経験はないだろうか？　おそらく、ここで心当たりのある人は、血液型に性格が表れるということに真実性があると感じているのだろう。しかし、それがどういうメカニズムで実証されるのかと問われれば、きちんと答えられる人はいないはずだ。

また、一時期の健康ブームに乗って大流行した「マイナスイオン」というものについても同様のことが言える。この言葉には、いかにも科学的なイメージが漂うため、無条件にその効能を信じてしまう人もたくさんいたようだが、実は科学用語にそんなものは存在しない。こういった項目はすべて①「ニセ科学」とでも呼ぶべきものである。

実際、現代の社会には「ニセ科学」が※蔓延している。科学のふりをすることで、不合理なことでも堂々とまかりとおってしまっている。これは、僕のように多少なりとも科学に携わる人間にとっては、うかうか見過ごせない問題だ。なにより、悪質な「ニセ科学」によって人生を大きく狂わせてしまうケースだってあるのだから。

この授業を通じて君たちに伝えたいこと。それは、「科学」と「ニセ科学」の違いを知り、その見極め方を自分の目で養ってもらうことだ。そのためには、本当の意味での科学的な思考を身につける必要がある。

ではそもそも「科学」とは何か。

英語で表すと「science」（サイエンス）だが、元々の語源はラテン語の「scientia」（スキエンティア）という言葉に由来する。この「sci」というのは「知る」、「entia」というのは「成す」という意味を表す。「知るを成す」すなわち、総合的な知識を得るという意味だ。つまり、「science」という言葉

は、本来は自然科学のみを指す言葉ではなく、さまざまな分野のさまざまな知識を得るという意味で使われていた。もっぱら自然科学のみを意味するようになったのは一九世紀半ば頃になってからである。

したがって、簡単に整理するなら、理論と実証によって客観世界・自然世界の※普遍的な原理や法則を発見することが「科学」。別の表現をすれば、研究によって獲得し、実験によって確立した知識とも言える。つまり、②研究し、実証するということが科学にとって非常に重要なことなのだ。

加えて、科学には、いくつかの満たさねばならない要件がある。

例えば合理性。これは道理に適っているということ。それから論理性。すなわち筋道が通っているということ。そして実証性。実験や理論によって証明できるということ。それに普遍性。一つの事例だけに適用できるのではなく、似たような事例、あるいは質の違った事例にも適用できるということが重要である。それから無私性。個人の意向や願望に左右されないということ。自分自身が「こうあってほしい」「絶対こうあるはずだ」と思う気持ちはもちろん大事だが、科学とは本来、そういう個人的な意向や希望・願望とは無関係に成立するものなのだ。

それから③懐疑主義の必要性。つまり、疑義や批判を怠らないということ。実際、科学者というものは疑ぐり深い人種だ。ある結果を示されたとき、それが本当かどうか必ず疑う。疑って疑って、そのうえで納得したときに、初めて「正しい」という言葉に到達する。真理を得るためにはまず疑うことが必要なのである。そして最後に、公有性。誰もが同じように使えるということ。［ A ］、「どこでも、いつでも、誰でも」が成立して初めて「科学」と言える。

「科学」であるためには、これらすべての要件を満たしたものでなければならない。逆に言えば、これらの要件を満たさないものは科学とは言えない。すなわち、「ニセ科学」に属するのである。

（池内了『考える方法』より）

〔注〕

蔓延……のびひろがること。はびこりひろがること。

普遍……全体に広く行き渡ること。例外なくすべてのものにあてはまること。

問1　――部①とはどのようなものであるか、わかりやすく説明した一文をぬき出し、最初と最後の四字を答えなさい。なお、字数には句読点も入ります。

問2　――部②とありますが、研究し、実証することが、なぜ科学にとって非常に重要なのですか。「科学とは、」を書きだしとして、五十字以内で説明しなさい。

問3　科学に必要となる条件について説明した次の文章の〔　ア　〕〔　イ　〕にあてはまる語句をあとの1～4からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

科学には理論と実証以外にも重要な要素がいくつかある。科学とは本来は個人的な意向や願望とは無関係である時に成立する。つまり、ある一つの事柄(がら)だけにあてはまるのではなく、他の性質の異なる物事にも適用できるという〔　ア　〕、物事の順序が整理されて理解しやすいという〔　イ　〕などが必要である。

1　合理性　　2　論理性
3　実証性　　4　普遍(ふへん)性

問4　――部③とありますが、どのようなことですか。筆者の主張として適切なものをあとの1～4から選び、番号で答えなさい。

1　ある結果が示された時に、それが間違(まちが)っているものという前提で向き合うこと。
2　ある事柄を最初から本当だと認識せずに疑い、納得してから正しいと思うこと。
3　物事が提示された時に、受け手側が批判することの責任を認識してとらえること。
4　人間が疑り深い人種だと理解し、真理に納得してもらえるまで何度も説明すること。

問5　［　A　］に適する言葉をあとの1～4から選び、番号で答えなさい。

1　ゆえに　　2　しかし
3　つまり　　4　それから

問6　本文から筆者の主張として適切なものをあとの1～4から選び、番号で答えなさい。

1　「マイナスイオン」などの科学的なイメージによって効能を主張する事柄にまどわされないようにするためには、本格的に科学を学ぶ必要がある。

2　科学を本質的に理解するには、様々な客観世界の事柄を理解する必要があるため、理系文系問わず幅広い学問分野で研究と実証を繰り返していくべきである。

3　科学には、個人の意向や願望により成立することがあるため、自分と異なる思考の人の助言を受けるように意識することが大切である。

4　科学のふりをした不合理な事柄も多く広がってしまう現代社会では、「科学」と「ニセ科学」を見極める、真の科学的思考を身につけることが重要である。

五　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、※にはあとに〔注〕があります。

ずいぶん遠くの町へ引っ越すことになった。

東京からＪＲで八時間。飛行機とバスを乗り継ぐと、三時間。何も考えず、何も心に入れないようにして、引っ越しの手配をし、僕たちは飛行機に乗り込んだ。

空港に降り立ったときのことははっきりと覚えている。あまりにも空が深くて、青くて、気持ちも考えも思いも、何もかもどうでもよくなってしまいそうだった。

そうだ、何もかもどうでもよくなってしまいたくて、でもそれではいけないと思って、僕たちはここへ来たのだ。

梅雨の中日に母さんが死んだ。残された僕たち――父さんと、妹と、僕――は、四十九日を済ませると、【　ア　】母さんの郷里へ身を寄せた。製薬会社で研究職をしていた父さんは仕事を辞め、僕と四つ下の妹はそれぞれ中学校と小学校を変わることになった。しかたがなかった。母さんのいなくなった部屋で、三人で暮らしていくのはむずかしかった。

厳密にいえば、暮らしていけないこともなかったんだろう。僕はもう中学二年生なのだから、妹の面倒を見ながらなんとかやっていくことはできたかもしれない。父さんだって、がんばれば少しくらいは会社から早く帰ってくることもできただろう。

だけど、がんばるってどうすることだったか、忘れてしまった。どうしても思い出すことができなかった。がんばろうとすればするほど、①何かが間違っている気がした。僕たちは何もかも変えなきゃいけないんじゃないか。母さんがいない世界を生きのびるには、何もかもやり直さなきゃならないんじゃないか。きっと父さんもそう思ったのだ。

母さんの生まれ故郷は、九州にある小さな町だった。ひとり娘を亡くして悲嘆に暮れていた夫婦が――つまり、僕たちのおじいちゃんとおばあちゃんが――自分たちの古くて広い家に呼び寄せてくれた。

「お世話になります」

父さんが深々と頭を下げた。

「少し落ち着いたら、三人で住む場所を探します」

父さんは仕事も探さなきゃいけない。そのうえで住む場所を探すのは大変だろうなとぼんやり思った。ここは都会と違って、貸家や賃貸アパートが極端に少ないらしい。

「なんにも急ぐことないよ。ここでゆっくり暮らして、いつ

かいい家が見つかったら出ていけばいい」

おばあちゃんはそういってくれた。にこにこ笑っていた。つらくても、にこにこすることってできるんだな。おばあちゃんの笑顔を見て初めて知った。

おじいちゃんもおばあちゃんもやさしかった。僕たちが家財道具と共に引っ越した日には、すでに玄関前に「中村」「園田」とふたつの表札が掛けられていた。そんな気配りはなかなかできるものじゃない、と僕は気づかなかったけれど、父さんが感心したように教えてくれた。②申し訳なさそうでもあった。

僕たちがひっそりと生き直すにはちょうどいい町だった。小学校も中学校も一学年一クラスで、全員が顔見知りという話だったが、想像していたほど窮屈な感じはしなかった。そもそも、想像さえしていなかったのかもしれない。とにかく遠くへ引っ越して、誰も知らない僕として生き直す。新しい中学校を具体的にイメージする余裕はなかった。

ただ、クラスに僕が受け入れられているとはいい難かった。もともと社交的な人間ではないうえに、社交的になろうと微塵も思っていないのだ。うまくいえないけれど、とにかく、今は、誰もいらない。できることなら、学校へ通うのをしばらく免除してほしいくらいだった。でも、いわなかった。家族に心配をかけたくなかった。

父さんと、妹の菜月と、おじいちゃん、おばあちゃん。僕の家族は、みんなしてお互いを気遣っていた。気遣いすぎて、息をするのも苦しかった。家族というときに含まれていたはずの母さんがもういないのだということを、できるだけ考えないようにした。

学校から帰ってからも、僕はよく外を歩いた。前はどうやって時間を過ごしていたのだったか、もう思い出せなかった。ふらふらと歩いていくと、アーケードのついた商店街があった。人通りはあまり多くない。雑貨屋があり、花屋があり、クリーニング屋があり、その向こうに本屋があった。

少し、思い出した。「前」のこと。僕は本が好きで、「前」はよく本屋に行ったのだ。父さんが家で本を読むのを見たことがないから、僕はきっと母さんに似たんだろう。そう思ったら、もう駄目だった。せっかく入った本屋で、本の背表紙がちかちかしてうまく読み取ることができない。雑誌のコーナーをまわり、新刊の台を通り過ぎ、「当店のおすすめ」となっている棚から一冊、二冊、手に取って、また戻す。読みたい本がない。何を読んでいいのかわからない。

母さんのせいだというのはわかっていた。母さんが亡くなって、世界は色を失った。匂いが消え、音が遠くに聞こえ、何かが手に触れる感覚も鈍った。読みたい本など見つからなくて当然だった。

だけど、僕は思いのほか困っていた。シーソーに乗っていて、相手が下へ、僕が空中へ上ったときに、急に相手が下りてしまったみたいな、このままだと急降下して尾てい骨をシーソー越しにずがんと地面に打ちつけることになるとわかっていて、それでも手も足も出せない。ほんとうは、両足をシーソーより先に下ろして踏ん張れば、体重を支えることができる。痛い目に遭わずに済む。③そうわかっていて、手も足も出せずにいる。いや、出さないでいるのだ。僕の意思にかかわらず、僕の身体は動くことを拒否する。うまくやらなければ、無駄な痛みは避けなければ、と思っているのに、身体がいうことを聞いてくれない。

店の奥は、児童書のコーナーだった。菜月に何か買って帰ってあげよう。「前」には、彼女はよく児童書のコーナーで目を輝かせてあれこれ手を伸ばしていた。今はきっとそんな力もない。僕は知っている。彼女が毎晩蒲団の中で泣いて、声を殺して泣いて、やがて泣き疲れて眠るのを。菜月のくぐもった嗚咽が聞こえてくると、僕はやりきれない気持ちになる。かわいそうだと思うし、自分のことがかわいそうにも思えるし、何より母さんのことがかわいそうにも思えてきて、もう何をかわいそうがっていいのかさえわからなくなった。

ふと顔を上げると、棚の向こうから、女の子がこちらを覗いていた。

目が合って、あわてて逸らした。なつかしいような顔だった。心臓がどくどく音を立てていた。同じ学校の子だろうか、と思ったけれど、すぐに違うと気づいた。制服が違う。でも、同じ歳くらいだと思う。もう一度、そっと顔を上げると、彼女もこちらを見た。またすぐに視線を落とす。目が合うのがはずかしくて、彼女を見ていることが知られるだけでもはずかしくて、それなのに気になってまた見てしまう。

この感情が何なのか、僕にはわからなかった。彼女の姿を見たくて、本を選んでいるふりをしながら何度も様子を窺った。彼女は手に持っていた本を棚に戻すと、最後に一度こちらを振り返ってから、その場を離れた。

彼女が見ていた棚のところに行ってみる。どの本を見ていたのか探してみる。これかな、と手に取って、戻して、もう一度手に取って、それから考え直す。もしかしてあの子がこ

こに戻ってきたら。僕が持っているところを見られるのはとてつもなくはずかしい。

やっぱり戻そう。そう思った瞬間、彼女がそこに立っていた。

「それ、おもしろいよ」

何もいえずに突っ立っている間に、彼女はにっこり笑って、今度こそほんとうに店を出ていってしまった。

僕はその本を買った。

それが火曜日だった。金曜に、また本屋へ行った。期待せずに店に入ると、こないだと同じ場所に彼女が立っていた。

④「こないだは、ありがとう」

僕は勇気を振り絞ってお礼をいった。

「本を読んだのは、すごく久しぶりだった」

口にすると、それがどんなに大きなことかがわかった。本が好きだったのに、そんなことすら忘れていた。

「もしも、あの本が気に入ったのなら」

彼女は棚のほうを向き、ちょっと時間をかけて何冊か選んだ。それを僕に手渡すと、しっかりと目を見て微笑んだ。笑顔の意味はわからない。でも、⑤心臓が早鐘を打っていた。彼女が店を出ていくと、僕はお小遣いをはたいて、四冊全部を買った。

次に会ったのは、翌週の月曜だった。

「もう全部読んだの？」

彼女はうれしそうに笑った。うーん、じゃあ、今度はどうしようかなあ、などといいながら棚の間をまわってゆく。僕も一緒に歩いた。どんな本が好きかぽつぽつと話しながら店内を一周すると、彼女の腕には何冊かの本が抱えられていた。文庫が三冊に※ハードカバーが一冊。ハードカバーか。お年玉からお金を持ってきたから、買えないわけじゃない。だけど、ちょっと困った。

「これ、女ものじゃない？」

「女ものって」

彼女は首を振って笑った。ふと、どこかでこんな笑い方をするひとを見たことがある、という思いが頭をかすめた。

（宮下奈都『つぼみ』より）

〔注〕

ハードカバー……「上製本」とも呼ばれ、耐久性が高く、高級感がある本のこと。

問1　【　ア　】にあてはまる言葉として最も適切なものを1～4から選び、番号で答えなさい。

1　いそいそと　　2　そそくさと
3　はっきりと　　4　おずおずと

問2　――部①とありますが、「僕」の家族を適切に説明したものをあとの1～4から選び、番号で答えなさい。

1　母と暮らした家や町への愛着があるため父は転職を迷っていたが、父は会社から帰る時間が遅くなりがちな研究職と子育ての両立を目指す元気を無くしている。
2　母を亡くした家族は全員、その悲しみを忘れようと自分のことに集中していたが、日に日に心が疲れてその努力の方向は間違っていたと認識をするようになった。
3　母を亡くした「僕」の家族は、今まで暮らした家での暮らしを続ける努力よりも、環境を変えて家族の新たな生活を作っていく必要があると考えている。
4　母を亡くして父の仕事が変わった今、経済的に今の暮らしを続けられないことはわかっていたが、母の生まれ故郷で祖父の助けを借りる選択はできないでいる。

問3　――部②とありますが、この時の父の心情を説明しなさい。

問4　――部③とありますが、それはなぜですか。三十字以内で説明しなさい。

問5　――部④とありますが、どのようなことに対するお礼ですか。あとの1～4から最も適するものを選び、番号で答えなさい。

1　見知らぬ土地の本屋で、少女が自分に面白いと思う本をすすめてくれたこと。
2　以前は好きだった読書を通じて母の死から立ち直るきっかけをくれたこと。
3　思いを寄せる少女と知り合うきっかけを少女の方からくれたこと。
4　少女が見ていた本を探していた自分を、全く気にせず会話をしてくれたこと。

問6　――部⑤のこのときの心情を表す熟語として適するものをあとの1～4から選び、番号で答えなさい。

1　歓喜　　2　高揚
3　悲嘆　　4　焦燥

問7　本文の登場人物についての説明として適切なものをあとの1～4から選び、番号で答えなさい。

1　「僕」の父は、生活を助けてくれる祖父に感謝を感じながらも、母を失った悲しみからその温情を素直に受け止められずに卑屈になっている。

2　「僕」の妹は、母を亡くした現実をよく理解できず、悲しみに暮れて、気を遣う家族に対しても遠慮無く自分の感情を表現している。

3　本屋で出会った「彼女」は、「僕」の悲しみなどおかまいなしに面白い本をすすめて読書仲間を増やそうと天真爛漫に振る舞っている。

4　「僕」は母を失った悲しみから簡単にはぬけ出せなかったが、少女との出会いから徐々に自分の人生に向き合い始めている。

六　次の詩を読み、あとの問いに答えなさい。

――「時」の海を泳ぐ①稚魚のようにすらりとした柿の種

人や鳥や獣たちが
柿の実を食べ、種を捨てる
――②これは、おそらく「時」の計らい。

種子が、かりに
味も香りも良い果肉のようであったなら
貪欲な「現在」の舌を喜ばせ
果肉と共に食いつくされるだろう。
「時」は、それを避け、
種子には好ましい味をつけなかった。

③固い種子――
「現在」の評判や関心から無視され
それ故、流行に迎合する必要もなく
己を守り
「未来」への芽を
安全に内蔵している種子。

人間の歴史にも
④同時代の味覚に合わない種子があって
明日をひっそり担っていることが多い。

（吉野弘『種子について』より）

問1　――部①は何を表していますか。最も適するものをあとの1～4から選び、番号で答えなさい。

1　食料として、生き物の舌を喜ばせる存在。
2　力強く跳ねる、自信に満ちあふれた存在。
3　群れでにぎやかに泳ぐ、活気のある存在。
4　小さくか弱いが、未来へと生き延びる存在。

問2　――部②とありますが、ここで「時」が計らったこととはどのようなことですか。二十字程度で説明しなさい。

問3　――部③と対比的に考えられる存在として最も適するものをあとの1～4から選び、番号で答えなさい。

1　味も香りも良い果肉
2　未来の芽を守る他の種子
3　「時」の海を泳ぐ稚魚
4　流行に迎合しない種子

問4　――部④とはどのような人のことですか。次の文の空欄A・Bに入る適切な文をA・Bそれぞれの1～4から選び、番号で答えなさい。

現在は、[A]が、将来[B]人。

[A]
1　価値がなく世間から好まれない
2　時の流行に迎合する必要がある
3　評判や関心から無視されている
4　保守的で自分の未来に期待する

[B]
1　現実を見失わない
2　流行を受け入れる
3　人々から愛される
4　価値を認められる